難波西鶴と海の道

【71】

森田 雅也

「風呂釜の大臣」万屋三弥

京にはまって水運ばす

西鶴の『日本永代蔵』「貞享5（1688）年刊」巻三の二「国に移して風呂釜の大臣」の副題は「豊後かくれなきまねの長者」です。この「まねの長者」が、当時の豊後（大分県）の伝説「真野の長者」のもじりであることは、前回述べました。

作品では、今の大分市に住む万屋三弥の物語となっています。見事に天寿を全うした父。家督を継いだ三弥は、父の3年の喪を守り、母にも孝養を尽くし、父譲りの堅実な商いを行います。しかし、父の喪があけると、遺言の「すぎはひ（生活）の種を大事」に商売の工夫を思いつき、「菜種油」の商いに乗り出します。

まず、人里離れたススキ原が何にも活用されていないことに目をつけ、ひそかに菜種をまいてみます。すると翌年、見事に花や実をつけました。そこで、この場所を新田として払い下げを願い出て、大規模に開発すると、10年間年貢がいらないこともあって、大いに金銀がたまりました。

次に、それを資本として上方への「船商ひ」、つまりは海の道を利用した回船業に乗り出したのです。ついには、「西国にならびなき次第長者（にわか成金）となりて、何の不足もなし」という身の上になります。

ここで終われば、めでたしめでたしになりますが、終わらないのが現実であり、西鶴咄です。

商売は多くの手代任せ。自分自身で上方に来る必要はなかったのですが、親孝行を思い立ったのでしょうか、母を連れて春の京都見物へとやってきます。ところが、「田舎」と春の花の色は同じでしたが、花見る人が大違い。とても個性豊かな美人の多い都に夢中になってしまいます。

そこで、滞在中に12人もの美女を「妾者（てかけもの）」として抱え、そのまま豊後へと連れ帰ります。そして、京風の自宅を新築し、金箔の瓦、四方に3階建ての宝蔵を建てるなどした上、庭園、亭などに贅の限りを尽くします。

冬は雪の朝、夏は夕涼み。風流三昧の上に、美女たちを二手に分け、唐の玄宗皇帝の花軍をまねた遊びをし、世間の人に「むかしの真野の長者も、この奢りには何としてかは及ぶまじ」と言わせます。

一家親族も、この姿を嘆きますが、全くやまず、しっかり者の手代が亡くなってからは浪費がエスカレートし、豊後の水はいやと、毎日、京都清水寺の音羽の滝の水を運ばせ、風呂を沸かすという愚かな贅沢を楽しみました。

昔にも、東北松島の塩釜の景色を京都六条に再現した源融大臣の愚行がありましたが、人々はそれをもじって「風呂釜の大臣」と呼んで嘲笑しました。この堕落。案の定、ある年、万屋は赤字を出すと瞬く間に破綻し他界してしまいます。何とも惨めなサクセスストーリーですね。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）